

日本橋南はドイツ風吹かず

明治の一時期、東京では「日本橋南はドイツ風吹かず」といった川柳のようなものが流行ったことがあった。

日本の医学は、明治4年（1871）に東京大学がドイツ人教師を招いて医学教育をはじめたことで大きく前進したが、この大学を手本にして全国にそのコピーをつくっていったため、当時の学理中心のドイツ医学が全国を風靡することになった。

東京でも日本橋の北側では、その東京大学を中心に陸軍軍医学校や大病院の順天堂病院や医学校の済生学舎などがドイツ風を吹き、そこではドイツ語をつかう医者が大きく幅を利かせていた。そんな中において日本橋の南側にはそのようなドイツ風が吹かず、代わりに英国風とでもいべき患者中心の医風が吹いていたというのである。

たしかに日本橋の南側では、高木兼寛をはじめ英国医学を学んだ多くの海軍軍医が高輪の東京海軍病院（院長・高木）や芝公園の海軍軍医学校（校長・高木）に勤務し、その近辺（芝、麻布、銀座など）に居住、開業していたし、また彼らの多くは高木のつくった芝愛宕町の慈恵医学校や慈恵病院（慈善病院）で活躍していたのである。さらに蘭学・英学塾にはじまる福沢諭吉の慶応義塾が三田に居を構えていたのもその感を一層強くしたであろう。またこの近辺では高木、福沢を中心にヘボン、シモンズ、エルドリッジ、ホイットニーら多くの英米医師が活躍していた。

高木の英国医学の修養は、鹿児島医学校での英医・ウイリスへの師事にはじまり、東京海軍病院での英医・アンダーソンへの師事、さらに英国セント・トーマス病院医学校での本格的履修で終わるわけであるが、

彼が英国医学にたいして絶大な信頼をおくようになったのは、おそらく脚気病の研究での体験であったと思われる。

学理中心の思弁的なドイツ学派（脚気伝染病説派）の学者たちを向こうにまわして、高木は自らが確立した栄養説をもって戦ったのである（脚気論争として知られる）。そして思弁より経験を重んじる英国医学の実証的な疫学的方法によって完全に勝利したのであった。食餌を改善することによって完全に脚気を駆逐することに成功したのである。彼の成果を多くの英文論文にして国外にも発表した（彼が国内より国際的に有名なのはそのためである）。

慈恵医学校が専門学校に昇格したとき（1903）、高木は文部省に、外国語履修をドイツ語でなく英語だけにする理由をこう説明している。「国内用の医師をつくるにはドイツ語でも可能であるが、国際的な医師をつくるには英語の方がはるかに優れている」と。そして学生にたいしても「英語は世界語であるから、まずこれを習熟せねばならぬ。ドイツ語の優れた業績も直ちに英訳されるから、英語のほかにドイツ語を学ぶ必要はない」と説明した。慈恵医学校が後々まで「わが国唯一の英国流の医学教育機関」として有名になったのはそのためである。

高木の英国流医学にたいする絶大な信頼は生涯くずれることにはなかった。教員の派遣留学先もちろん英（米）に決まっていた。晩年（1919）、永山武美（医化学教授）が留学するときにも、永山が「どうかドイツの方にもやっていただきたいのですが」と願うと、「ドイツに行きたいのなら自費で行け」と怒鳴られたという。

第二次大戦後、米（英）医学がドイツ医学にかわって全国に広がった現状を、もし高木が眺めたらどうであろう、面食らってしばらく言葉を失うのではないだろうか。